

オセアニア[NZ]



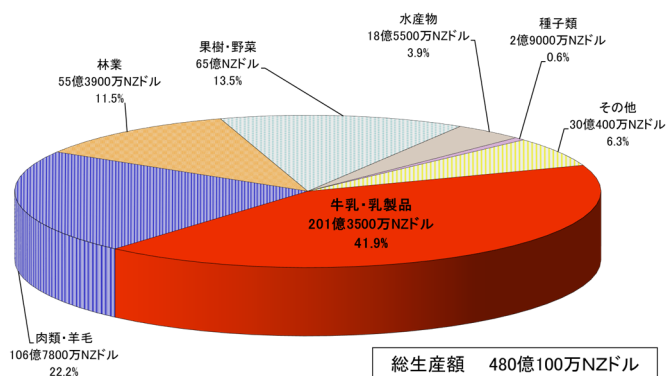
1 農・畜産業の概況

ニュージーランド（NZ）は、国土面積（2680万ヘクタール）の4割強に当たる1356万ヘクタールが農地となる農業立国である。また、人口は約512万人（2021年）と、農業生産に対して国内の市場規模が小さいため、農畜産業は貿易に依存する状況となっている。総輸出額に占める農畜産物の輸出額（FOB）の割合は約6割となり、外貨獲得上、重要な地位にある。

このうち、畜産部門は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額ともに約7割を占め、特に牛乳・乳製品は、双方ともに4割以上を占めるなど基幹部門となっている。

2019/20年度（4月～翌3月）の農林水産業粗生産額は、480億100万NZドル（前年度比3.6%増）となった（図1）。

図1 農林水産業粗生産額（2019/20年度）



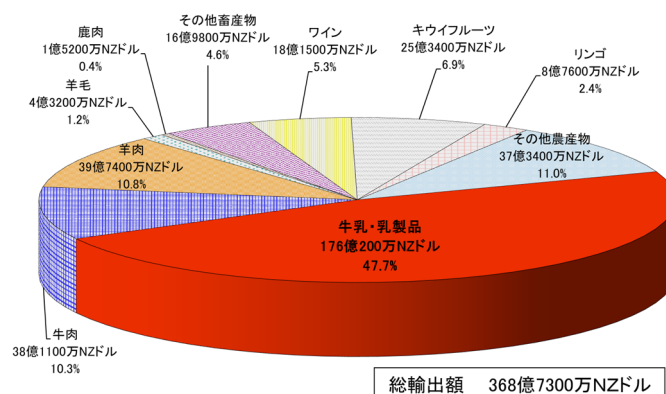
資料：NZ一次産業省「Situation and Outlook for Primary Industries」
注：年度は4月～翌3月。

このうち、牛乳・乳製品は、全粉乳を中心に乳製品の輸出価格が高値で推移したことから、粗生産額を押し上げ、前年度と比較するとかなり大きく増加（201億3500万NZドル、同11.2%増）した。また、肉類・羊毛は、肉牛および羊のと畜頭数や価格が高水準であったことがけん引し、106億7800万NZドル（同4.9%増）とやや増加した。さらに、果樹・野菜

は、キウイフルーツを中心とした果樹の生産が好調となったことで、65億NZドル（同6.4%増）とかなりの程度増加した。

19/20年度（7月～翌6月）の農畜産物輸出額（FOB）は、これら農畜産物生産の増加やNZ産の輸出需要などを要因に368億7300万NZドル（同8.2%増）とかなりの程度増加した（図2）。

図2 農畜産物輸出額（2019/20年度）



資料：Beef + Lamb NZ「Farm Facts」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：林業および水産業を除く。

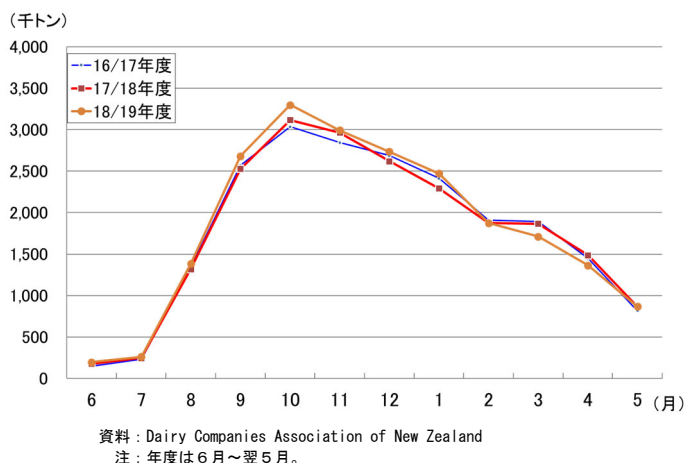
品目別に見ると、牛乳・乳製品は、全粉乳やバターへの輸出価格が高値で推移したことなどから、前年度比でかなりの程度増加（176億200万NZドル、同10.7%増）した。牛肉は、輸出価格が引き続き高水準で推移したことから、かなり大きく増加（38億1100万NZドル、同14.7%増）した。また、羊肉（ラム・マトン）は39億7400万NZドル（同4.5%増）となった。一方、主要輸出品目であった羊毛は、4億3200万NZドル（同21.3%減）と大幅に減少した。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、早春となる8月に搾乳を開始し、10月から初夏となる12月に生乳生産のピークを迎え、翌年6～7月にはほとんどの搾乳牛が乾乳し分娩に備えるという、明確な季節型の生産体系となっている（図3）。そのため、生乳生産の中心となる9月～翌2月の半年間で、年間生産量の約4分の3を生産する。

図3 生乳生産量の推移



NZの生乳生産コストは、放牧中心の飼養形態から世界的に見て最も低い水準にあり、生産量の9割以上が輸出に仕向けられる。

NZは、生乳生産量では全世界のわずか約3%に過ぎないが、世界最大の乳製品輸出国で、特に全粉乳の国際市場でのシェアは約6割を占めている。しかし国内市場の規模が小さいため、生産者乳価や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けやすい特徴を有している。

① 主要な政策

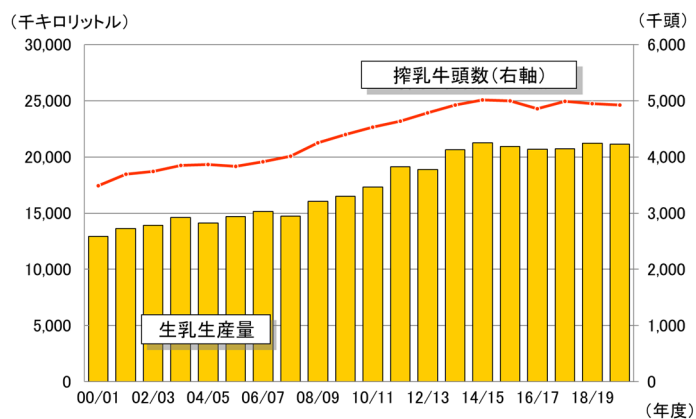
酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。2001年9月まで、ニュージーランド・デイリーボード(NZDB)が乳製品の一元的輸出機能を有していたが、酪農産業の再編が行われ、同年10月、キウイとNZデイリー・グループの2大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協(乳業も兼ねる)であるフォンテラが誕生した。

フォンテラの誕生に合わせて、01年に生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法(Dairy Industry Restructuring Act 2001)が成立した。同法には、同社の独占による弊害を回避するため、乳業の新規参入機会の付与などが盛り込まれていた。また、同法では同社に対し、集乳の義務や集乳した生乳の一定量を、他社の求めに応じて供給することが義務付けられていたが、NZにおける同社の市場シェアが、この20年間で約8割程度にまで低下していることを背景に、20年7月、同社における生産者からの生乳受け入れ義務を、一定の条件のもとで免除するなどの法改正が行われており、23年6月から施行されることとなっている。

② 生乳の生産動向

搾乳牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加、さらに、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換などを受け、増加傾向で推移してきた。最近の状況を見ると、2015/16年度から乳製品国際価格の低迷に伴い淘汰が進んだことで、搾乳牛飼養頭数は2年連続で減少した(図4)。17/18年度には、乳製品輸出価格が回復したことなどを反映して増加に転じたものの、18/19年度には再び減少に転じ、19/20年度も引き続き減少した。

図4 生乳生産量と搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注1：年度は6月～翌5月。

注2：搾乳牛飼養頭数は12月末時点。

また、NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域を中心に行われてきた。しかし、近年では、人口が少なく草地面積の広い南島のカンタベリー地域などがかんがい施設が整備されたことから、特に南島での頭数拡大が著しくなっている。しかしながら、19年（12月時点）の搾乳牛飼養頭数は北島の減少に押され、全体で492万2000頭（前年度比0.5%減）とわずかに減少した（表1）。従来からの主産地である北島は285万7000頭（同1.2%減）、新興の酪農生産地である南島は206万4000頭（同0.4%増）となった。

表1 地域別の搾乳牛飼養戸数・頭数・規模の推移

地域・区分／年度		15/16	16/17	17/18	18/19	19/20
北島	飼養頭数(千頭)	2,986	2,896	2,952	2,891	2,857
	飼養戸数(戸)	8,696	8,529	8,377	8,156	7,979
	1戸当たり飼養頭数(頭)	343	340	352	354	358
南島	飼養頭数(千頭)	2,012	1,965	2,041	2,056	2,064
	飼養戸数(戸)	3,222	3,219	3,213	3,216	3,200
	1戸当たり飼養頭数(頭)	624	611	635	639	645
合計	飼養頭数(千頭)	4,998	4,861	4,993	4,946	4,922
	飼養戸数(戸)	11,918	11,748	11,590	11,372	11,179
	1戸当たり飼養頭数(頭)	419	414	431	435	440

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注1：各年12月末時点。

注2：搾乳牛の頭数および戸数。

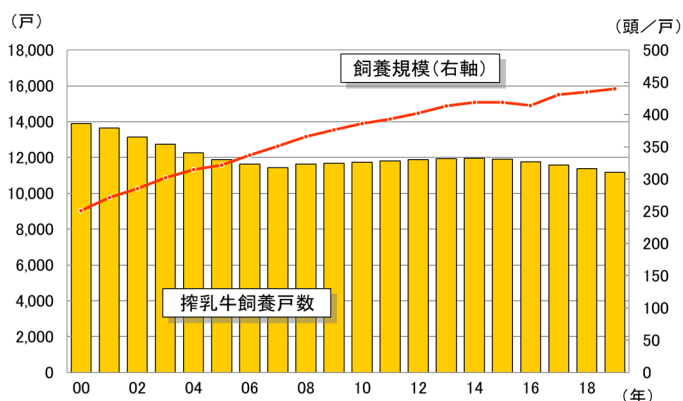
生乳生産量は、搾乳牛頭数の増加に加えて補助飼料の給与増加による1頭当たり乳量の増加もあり、右肩上がりで推移してきた（図4）。しかし、乳製品輸出価格の低迷を受け、生産者乳価が引き下げられたことで生産者の生産意欲が減退し搾乳牛頭数が減少したことから、15/16年度から2年連続で前年度を下回った。18/19年度は、春季の気候に恵まれ牧草地の生育が

良好であったことから前年度を上回った。19/20年度は、飼養頭数が前年度を下回ったものの、1頭当たりの生乳生産量が過去最高となったことから、2114万5000キロリットル（同0.3%減）と前年度並みとなった。

飼養戸数は、07年に乳製品国際価格が高騰して以降、14年（1万1970戸）にかけて7年連続で前年を上回ってきたが、15年以降、乳価の低迷などを反映し減少傾向に転じ、19年は1万179戸（同1.7%減）と5年連続で減少した（図5）。

1戸当たり搾乳牛飼養頭数は、農家の規模拡大に伴いこれまで一貫して増加してきた。16年は、このような長期的な傾向に反して減少したものの、17年は431頭（同4.1%増）、18年は435頭（同0.9%増）、19年は440頭（同1.1%増）と3年連続で前年を上回り、引き続き増頭傾向を示している。

図5 搾乳牛飼養戸数と1戸当たり搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注：各年12月末時点。



写真1 乳用牛の放牧風景（北島：タラナキ地方）

③ 牛乳・乳製品の需給動向

NZの乳製品輸出先は、フォンテラの企業戦略と相まって、中国をはじめ、東南アジア、中東、北アフリカ、EU、北米など世界140カ国に及んでいる。同社は2002年に、世界的大手食品メーカー「ネスレ」と国内に合併企業を設立し、03年1月から、主に中南米市場での乳製品製造・販売を手掛けている。

19/20年度（7月～翌6月）の主な乳製品の輸出量のうち、全粉乳は、主要輸出先である中国からの引き合いが堅調であったものの、全体では149万9000トン（前年度比0.5%減）とわずかに減少した（表2）。また、バターについては、43万8000トン（同6.0%減）とかなりの程度減少した。脱脂粉乳は、中国向けのほか東南アジアからの引き合いが強まったことから、37万5000トン（同0.4%増）とわずかに増加した。チーズについては、32万4000トン（同2.8%減）とわずかに減少した。

表2 搾乳牛飼養頭数、生乳生産量および乳製品輸出量の推移

（単位：千頭、千キロリットル、千トン）

区分／年度		15/16	16/17	17/18	18/19	19/20
搾乳牛飼養頭数		4,998	4,861	4,993	4,946	4,922
生乳生産量		20,914	20,702	20,724	21,217	21,145
輸出量	全粉乳	1,357	1,354	1,366	1,506	1,499
	バター	505	476	452	466	438
	脱脂粉乳	428	415	394	374	375
	チーズ	340	352	330	333	324

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注1：経産牛飼養頭数は12月末時点、単位は千頭。

注2：生乳生産量は6月～翌5月、単位は千キロリットル。

注3：乳製品輸出量は7月～翌6月、単位は千トン。

④ 生産者乳価と生産コストの動向

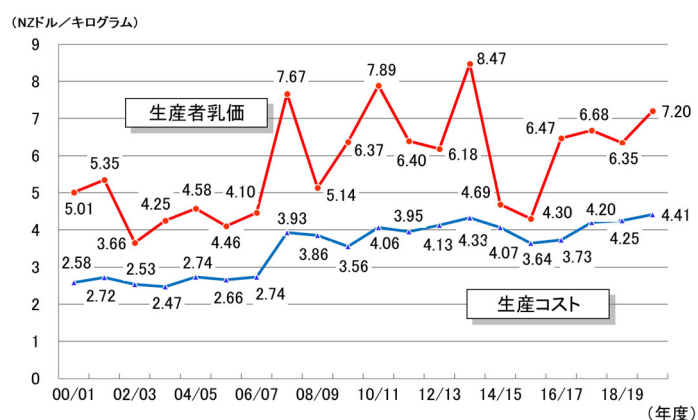
同国の生産者乳価は、乳製品の高い輸出依存度を背景に、国際的な価格動向や為替相場の動向などに左右される傾向にある。

2019/20年度（6月～翌5月）の生産者乳価（平均支払乳価）は、生乳の固形分^{（注）}1キログラム当たり7.20NZドル（同13.4%増）と、過去10年の平均乳価である同6.38NZドルから0.82NZドル上昇した（図6）。

生産コストは、2000年代後半に入ってから、乳価の上昇を受け、放牧中心の低コスト生産が特徴のNZ酪農においても、濃厚飼料の給与が増加したことにより、微増傾向で推移してきた。しかし、14/15年度および15/16年度は、乳価低迷により、生産者が補助飼料の給与やかんがい施設への投資などを抑制したことから低下した。19/20年度は、乳価の上昇を受け、生産者の生乳増産意欲が高まり、補助飼料の給与を行ったことなどから、同4.41NZドル（同3.8%増）と4年連続で増加した。

（注）乳脂肪分および乳たんぱく質。

図6 生産者乳価と生産コストの推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、'Economic Survey」

注1：年度は6月～翌5月。

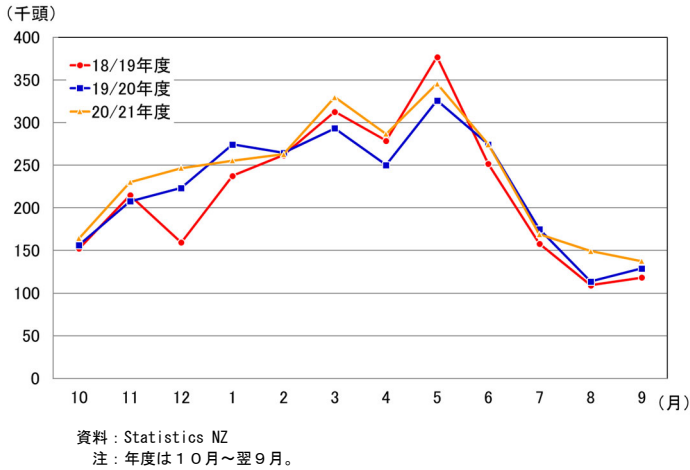
注2：生乳の固形分ベース。

（2）肉牛・牛肉産業

NZの肉用牛生産は、酪農と同じく草地に依存した生産体系となっており、フィードロットなど穀物肥育による生産は、ごくわずかである。また、牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることは、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、肉用牛のと畜頭数は牧草の生育が良好な春（9～11月）から夏（12月～翌2月）にかけて増加し、冬（6～9月）に減少する（図7）。一方、と畜頭数全体の4割程度を占める経産牛は、大部分が乳用経産牛であり、草地の牧養力が落ち、乾草などが必要になる冬季に向けて酪農部門から出荷され、飼料の節約を行う必要がある秋季の5月にピークを迎える。

図7 成牛と畜頭数の推移



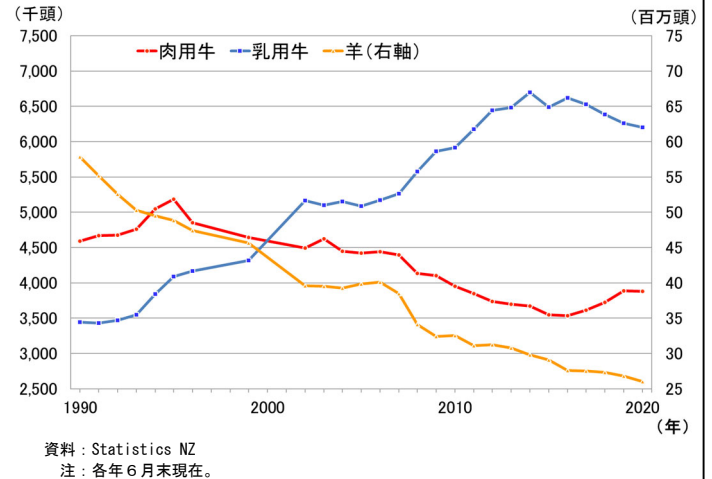
また、肉用牛として飼養される牛の約2割は、乳用種または交雑種（乳用種×肉用種）である。酪農部門から供給される乳用種のうち、経産牛は加工用牛肉（挽き材用）として、主に米国を中心に輸出されている。また雄子牛は、一部は肥育に回されるものの、多くが生後4日程度でと畜され、主にベビーフードやペットフード向けに仕向けられる。

NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉の8割程度（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受けている。

① 肉用牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業などより収益性の高い部門への転換などにより、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には右肩上がりに増加している乳用牛と逆転した（図8）。その後、14年をピークに乳用牛の飼養頭数は減少傾向となっている一方、16年以降、牛肉の価格が好調であったことから肉用牛の飼養頭数は増加傾向となっている。

図8 主要家畜の飼養頭数の推移



肉用牛飼養頭数は、長期的には減少傾向にあるが、20年6月末時点では、中国でのアフリカ豚熱発生などにより、牛肉輸出価格が比較的好調であったことや、酪農の収益性が悪化したことなどの影響を受け、388万頭（前年比0.2%減）と前年度並みとなった（表3）。

表3 肉用牛飼養頭数の推移

（単位：千頭）

区分／年	2016	2017	2018	2019	2020
肉用牛	3,533	3,616	3,721	3,890	3,883
うち繁殖雌牛	954	976	1,029	1,105	1,067

資料：Statistics NZ
注：各年6月末時点。

② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少が続いており、10/11～13/14年度は、60万トンを超える水準で推移した。

15/16年度は、北島の干ばつや米国向け輸出需要の高まりによる乳用牛淘汰が一段落したこと、成牛と畜頭数は258万5000頭（前年度比5.0%減）、牛肉生産量は63万3000トン（同4.2%減）とともに前年度比で減少した。

16/17年度は、酪農の経営環境が改善し、乳用牛の保留が進んだことなどから、成牛と畜頭数は239万3000頭（同7.1%減）、牛肉生産量は60万

5000トン（同4.1%減）と減少した（表4）。

17/18年度は、比較的高水準な肉牛取引価格と、17年後半に発生した干ばつにより牧草の生育が悪かったことから、淘汰が増加したものとみられ成牛と畜頭数は、259万2000頭（同7.8%増）、牛肉生産量は、65万1000トン（同7.1%増）とかなりの程度増加した。その後も、と畜頭数や牛肉生産量は増加基調を維持し、19/20年度は輸出需要が堅調に推移したことから、成牛のと畜頭数は268万8000頭（同2.1%増）、牛肉生産量は68万2000トン（同2.1%増）といずれも2年連続で増加した。

イ 輸出動向

近年の牛肉生産量の増加基調に合わせる形で、NZ産牛肉の輸出も堅調にあり、2019/20年度の牛肉輸出量は、46万5438トン（同2.7%増）と増加した（表4）。

輸出先別に見ると、最大の輸出先である中国向けは17万8823トン（同9.6%減）とかなりの程度減少した。第2位の輸出先である米国向けは15万831トン（同15.5%増）とかなり大きく増加した。日本向けについては、2万2334トン（同16.8%増）と大幅に増加した。

表4 牛肉需給の推移

区分／年度	15/16	16/17	17/18	18/19	19/20
成牛と畜頭数(千頭)	2,585	2,393	2,592	2,631	2,688
子牛と畜頭数(千頭)	1,995	1,764	1,829	1,816	1,903
牛肉生産量(千トン)	633	605	651	667	682
子牛肉生産量(千トン)	31	28	30	29	30
牛肉輸出量(千トン)	424	396	431	453	465

資料：Statistics NZ、Beef + Lamb NZ「Annual Report」

注1：年度は10月～翌9月。

注2：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

③ 輸出用肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉の8割程度（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況のほか、為替相場や最大の輸出先である米国からの需要に左右される傾向がある。

輸出用肉用牛の生産者手取価格は、米国や中国からの牛肉需要が顕著であることから、2010/11年度以

降、比較的高い水準を維持している。19/20年度は、1頭当たり1222NZドル（前年度比0.1%減）と前年度並みとなった（表5）。

表5 輸出用肉用牛の1頭当たり手取価格の推移

（単位：NZドル/頭）

区分／年度	15/16	16/17	17/18	18/19	19/20
生産者手取価格	1,181	1,252	1,245	1,223	1,222

資料：BLNZ「Compendium of New Zealand Farm Facts」

注1：年度は10月～翌9月。

注2：皮革を含む。